

---

# 黒鷗十戦神

mayone-zuu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒鷲十戦神

### 【Nコード】

N3288Z

### 【作者名】

mayone-zuu

### 【あらすじ】

タイトルは《こくよう せんき》と読みます。

ひよんな事で異世界へ旅立ってしまったクガ・コウイチ玖珂光一

そこは、群雄割拠 国同士の戦争が激化したファンタジー世界だった。

更に、元の世界に戻る為はある条件が必要で。

「このヘルガント大陸から戦争を無くさないと帰れません」

「実家に帰らせてください……」

## プロローグ（前書き）

別作品と同時進行ですので更新が遅れがちです。  
（作者のやる気の  
問題だという事は伏せておく（ry……）

## プロローグ

なんという事でしょう。

いつも見慣れていた景色が全く違うものとなっているではありませんか。

と、某大改造劇的のナレーションが俺の脳裏を通り過ぎていく。

うむ、らしくない。

いつもクールでカッコ良く、街中を歩いているだけなのに通り過ぎて行く女性達が振り返り頬を染めてしまう程の美貌を持つ俺様は、どうやらパニック症候群というものに襲われている様子である。

……とりあえず、最後に一言だけ言っておこうか？

調子乗って、ごめん。今はテンパってるから許して。

「動くな！」

威嚇するように怒鳴る男に、俺は自分に置かれている状況にまだ整理も理解も何も出来ていない。

俺を取り囲む、兵士にも見える、甲冑を纏った二〇人の男達は、大木を一刀両断しそうなメートル以上はあるロングソード的な剣を握り締めている。

更にその鋭い矛先を、あろう事かこの俺に向けているのだ。

それは何故か……。

説明するには、月日が流れるが如く時間を要するだろう。

そう、あれは、決して忘れ去ってはならない孤独の記憶。

悠久の罪を背負わされた、悲しき一匹の狼の物語。

「この食い逃げ野郎！ 大人しくお縄に付け！」

「く、くそうがア！ カッコ良くキメたのに今の台詞で台無しだ  
！」

そう。食い逃げという犯行を犯し、逃走を試みた愚かな人間。

それこそ、この俺こと玖珂光一クガ・コウイチ 只今を以て前科一となりました。

これは、ひよんな事から異世界へ旅だってしまった、玖珂光一の人  
生の中で最もスリリング溢れる物語である。

## 異世界の住民達

俺の名前は玖珂光一。クガ、コウイチ

高校卒業後は実家の自営業を継がなければならないという、未来を問答無用で約束されている憐れな一七歳だ。

今日は俺の友人が、家庭の事情により転校してしまう悲しき事態があるのだ。

今日でお別れ……だから俺達は、築き上げた友情という名の絆を確かなものとするために。

俺達は……この森林の山奥でサバイバルゲームを行う事を決定したのだった！

ところがどっこい。サバゲーを始めるのに結構、山の奥まで来てしまった事が、これから起こる災難に繋がるとは思ってもみなかった。

俺の友人、山崎……紹介面倒なんで友人Aとする。あ、後こいつは近い内に俺が抹殺するのでよろしく。

友人Aがたまたま井戸を見つけたのがキツカケだった。かなり古い井戸で、苔やら木の弦やらが生えて長年使われていないのは目に見えて明らかだった。

「うわぁ。貞子出て来そうだな」

そんな不気味な事を言い出す霧島……友人Bは、本当に不気味に感

じているようで、顔を僅かに歪ませる。

友人Bがそんな事を言い出したものだから、まだ昼前だというのに薄気味悪い空気が漂い始めた。

「なあ、覗いてみない？」

そんな事を言い出したのは愚かにも友人A。否、正真正銘のアホである。

こいつ、普段はヘラヘラしているクセに本当は幽霊や虫系といった類は苦手な正真正銘のチキン野郎なのに、何故に空気読めない事を言うのかね？

蜘蛛が大の苦手を理由に妹に退治してもらっているという秘密をクラス中に暴露してやろうか。

「ジャンケンで負けた奴が覗く事な！」

偉そうに言っているが、こいつ自身が負けた時どうするんだろうか。

俺は断固として宣言しよう。こいつが負けた暁には、俺は全力を以て、奴が井戸を覗いた瞬間に、背中を蹴り上げると誓おう。

結果。

「早く覗けよ玖珂！ ビビってんのか？ ああん？」

自分が勝ったからって調子に乗る友人A。この瞬間、俺と奴の友情に亀裂が走ったのは言うまでもない。

……しかし、勝負に負けたのは事実だ。俺は後一步前に踏み出せば、目の前にある井戸の中を覗ける所まで歩み寄っていた。

近付いて見てみると、やはり背筋が凍る雰囲気がある。本当に貞子が出てきそうな予感に、正直に言ってしまうは足が竦んでしまいそうになる。

それでも、俺は勇気を絞って井戸の中を覗き込んだ。

底知れぬ闇一色が広がっているだけの空洞。そこがどこまで続いているのか検討も付かないが、仮に飛び降りてもしたら命の保証はないと断言は出来る。

「何か見えるか？」

別の友人の声に、俺は姿勢を変えないまま「何も見えない」と声を上げて言おうとしたその時だった。

青白い光が、奥底から僅かに漏れるように輝き出した。それは小さな宝石のようにも見えたが、それは瞬く間に井戸全体を照らし出した。

「え　ちよつ、まつ!？」

刹那、俺の身体は吸い込まれて行くように井戸の底へと落ちて行った。

。

さて、説明はそれくらいにして、だ。

誰か……誰か助けてください！！

今まさに、世界の中心で救済を求めている玖珂光——ことこの俺は、  
絶体絶命の危機を迎えていた！

「待ちやがれ食い逃げ野郎！」

「ひいいいっ！」

腰まで伸びている、地平線まで続いていそうな林の中を駆けて早五分以上が経過。

大量の木々が日光を遮っている、険しい森の中に逃げ込んだのはいい。しかし、その追手が何よりも問題だった。

追手を撒く為に広々とした場所へは出ず、より険しく、足を踏み外したら崖に落ちてしまいそんな危険な場所へわざわざ踏み込んでいくというのに。

「くっそっ……。奴等、この場所を熟知してやがる……！」

追手を引き離すどころか、俺と追手の距離は一向に差が変わらない状況にある。

「いい加減に観念しろ！ 反省するのなら悪いようにはしないから！」

「ほ、本当か!?!」

追手の言葉に、俺の心が大きく揺らぐ。

正直、もう足も体力も気力も何もかもが限界に近い。あの井戸から落ちて今まで森の中を飲まず食わず、何日も彷徨い続けていたんだ。夜は夜で、獣の雄叫びや首筋に蛇が這っていた時は本当に怖くて眠れなかった。

そつだよな……どんな理由があろうと、食い逃げをした俺が全部悪いんだ。

追手の人も反省しているようなら悪いようにはしないって言うてるし……ここは観念して従って。

「だから大人しく俺達に……殺されるオ！」

ヒュンツ！ と俺の横顔を、風を切って通り過ぎて行く何かは、数メートル先にある木に突き刺さって停止する。

背筋がサァー……と冷たい嫌な汗が通る。それは獲物を仕留める時に使われる飛び道具である事は、俺でも知っている。

あらヤダ、聞いて奥さん。今の当たってたら確実に命落としてましたわよ。

「チツ……惜しい!」

「いや待ってエ!? 悪いようにしないって話はどこへ!?!」

冗談じゃないって! 奴等、本気で俺を殺る気満々ですね!?!

再び構える弓矢に気を取られていたのが運の尽き。前方に差し込まれる光に気付いた時には、

「ん?」

美しく輝く太陽の光を全身に浴びる玖珂光一は思った。

今この瞬間だけ、僕は神に愛されるただ一人の人間でありたいと。否、もはや人間とう種族を辞め、重力に縛られず、天空を優雅に舞い踊る鳥になりいと願った。

何故なら、先程までごく当たり前のように感じていた、足の裏で大地を踏みしめる感触がなくなっているという事そのものが不自然であり世界の理を無視した現象こそ超能力という超越された常識という名の枠を突き破る瞬間でありいあああああああああああああああ!?!?

「バカヤロオオオオ!! 俺はインディ ジョーンズ博士じゃねえんだぞオオオ!?!」

高さ三〇メートルくらいあるのかな?

ま、一言で言うのなら、俺は今まさに崖から落下中なのである。助かる見込み、○パーセントなのである。

『精霊の歌声　アメイジング！』

もう駄目だ……！！　と地上に衝突する瞬間に強く目を瞑った。

だが、いつまで経っても全身を強打する衝撃が襲って来ない事に、俺は恐る恐る目をゆっくりと開けてみる事にした。

もしかしたら、既に死んでいて天国に着いているかもしれない……そんな俺の考えを、まるで金属バットで窓ガラスを割るように呆気無く、それでいて俺の脳の許容量では到底理解出来ない状況が目の前で起こっていた。

簡単に言うなれば、俺は空中を浮いているのだ。更に詳細を述べるなら、俺は空中で尻もちを着いて、両手両足が地面と同じように『踏めている』という衝撃事実が目の前で起こっている。

何がどうなっているのかさっぱりで、理解する以上に混乱の方が大きい。

しばらくすると俺の身体は少しずつ地面へ近付いて行き、最後は何事もなく地面へ着地するという結果に終わった。

流れる大きな川が目の前にあり、先には大きな滝がその存在感を大きく表せていた。

「な……なん、なんだ……？」

困惑は、次第に恐怖に変わっていく。何がどうなったのか知らないが、俺は助かった。けれど、本当なら死んでいた筈なのだ。

色んな事があり過ぎて、落ち着こうとしても昂った感情が邪魔して余計に疲労感が襲い掛かる。

「良かった……間に合って」

そんな時に、この場は一人だと思っていた俺の横から、凜とした女性の声が聞こえてくる。

驚いて振り向いて見た時、全身に染み込んだ疲労が蒸発していくような、そんな安らぎに似た感覚を覚えた。

撫でるように吹く風が、彼女の金色の髪をなびかせる。胸当たりまで伸びた髪は、太陽の光を浴びる度に美しく輝いているようにも見えた。

宝石のように光る、深海を連想させる蒼く大きな瞳には、魅惑という魔力が宿っており、見れば吸い込まれそうな心境に陥る事だろう。

美しく繊細。優しく手に取らなければ壊れてしまうガラスのような身体。

数多の男が手を差し伸べてでも掴み取りたい、そんな美貌を持つ彼女が、まだ一五歳なりたての少女だとは、この時は思ってもみなかった。

「あ……間に、合って……？」

言葉が思つように出ないのは、初対面だからではない。まして、女性に対する免疫がない訳でもなかった。

胸を焼く熱い何かが、冷静さを保っていられなかった。これは、もしかして……ここ。

「あ、れ？」

少女の顔がぼやけて見えて　いや、視界全体が揺らいで……って、お？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3288z/>

---

黒鷲十戦神

2011年12月11日12時46分発行